第一次大連引揚船の船名（五十音順）および運航便数

雲仙丸3回、永徳丸5回、永禄丸4回、英彦丸4回、栄豊丸3回、遠州丸3回、恵山丸4回、信濃丸6回、信洋丸2回、新興丸3回、宗谷丸1回、高砂丸4回、辰春丸2回、辰日丸3回、第一大海丸4回、大久丸3回、大瑞丸3回、大郁丸2回、長運丸3回、日王丸1回、白龍丸1回、北鮮丸3回、間宮丸1回、明優丸3回、弥彦丸3回、米山丸2回

以上、延べ26隻／76便であった。

# 満洲から日本への引揚げ

池田雅躬
（満洲電業会、海蘭会）

満洲の人々にとって待ちに待った、内地へ帰れる日がやって来た。満洲電業の龍井社宅の人達もそれぞれ日程や班が組まれ、挨拶もそこそこに決められた場所に向かっていった。私の父は会社の責任者であったので、残留社員への仕事の引継ぎや以後の対策等で、無期限に残されたため、他の社員と同時に引揚げすることが出来なかった。一時父は、母に子供たちを連れて先に帰れと言っていたが、母は反対し遅くなっても一緒に引揚げることにした。

母は妊娠をしていたが、引揚げが決まり乳飲み子を引き連れての行動はとても無理だと判断し、強制的に出産した。生まれた子は一週間生きていたが、栄養を与えることは出来なかった。砂糖湯を作り、綿を丸めたものにしみ込ませ口にもっていくと、か細い力でしゃぶった。命が尽きると出勤前の父が、リンゴ箱に入れ肩に担いで、当時日本人が墓地としていた東山（龍井郊外）に葬ってきた。両親はどんなに辛かったか計り知れない。リンゴ箱を担いだ父の淋しそうな姿が目に残っている。

社宅も殆どの人が去り、静けさが漂っていた。そんな折家から外に出ても周りには誰もいない。淋しさがこみ上げてきた。そんな時は家の押入れに入って泣いた。母が心配して慰めてくれたが、その言葉を聞くと余計淋しくなって泣きじゃくった。別れた同級生や友達は、永遠の別れに成ろうとは思わなかった。引揚げ後に、同級生に会えたのはたったの一人であった。

留用を免れ、残されていた父の仕事も一段落したのか引揚げが決まって、責任者として帰還することになった。昭和21

年 10 月であった。引揚げを予想して少しずつ荷造りをした。持って帰れるものには制限があって、一人の持ちものはリュックサック一個と手提げのみと決められていた。その他お金や写真等にも制限があった。衣類・食料・携帯燃料・マッチ等必需品をリュックサックに入れたり、出したりを繰り返した。子供でも自分の衣類や持てそうな食料品を詰め込み背負わなければならなかったため、気持ちはだんだんと引き締っていった。

家や全ての物を捨てる別れの日が来た。リュックを背負い、親子連れだって手に持てるだけの物を持って家を出た。何度も後を振り返りながら、両親は悲壮な顔で先のわからない難民生活をスタートさせた。兄が小学 6 年生・私が小学 3 年生・妹が 5 歳の時で、まだ見ぬ日本への出発となった。父はグループ長として、龍井駅から出発することになった。駅前広場に沢山の人がリュックサックを背負って集まって来た。一人一人持ち物検査が始まり、写真など風景が写されているものはダメだった。お互いに不安を抱えながら待っていると、大人から子供まで物を没収された。

列車は貨物列車で無蓋車と呼ばれる屋根のない箱型のものであった。夫々荷物があるので、隙間無く着席したまま身動きが出来なかった。運行予定もわからず列車は走った。停まった所で食事や用を足した。食事は列車が止まった場所によって違い、大きな釜でコーリャンを焚いて配って呉れた所もあった。お腹を空かせた子供たちは、釜の底に焦げ付いたコーリャン飯が煎餅のようになっているものを貰うために行列をつくった。時には食事が支給されないこともあり、そんな時は持参した米を鍋で焚き、まるでキャンプそのものであった。先々のことを考え米は残し、毎日シャブシャブのお粥ばかりでひもじい思いをした。駅の途中で停車して降ろされることもあり、その場所に宿泊をする様な建屋等が無い時は、ゾロゾロと列をつくって寝泊り出来そうな所まで歩かねばならなかった。列車が急にブレーキをかけることもよくあり、長い連結をしているのでトコロテンの様に振動が伝わって振り落とされる人もいた。その人がその後どうなったのかはわからない。列車の乗り換えも度々あって、その時は次の列車が何時にくるのかわからないまま野宿をした。

野宿をした待機所の中で、大人たちの怒りが爆発したのか、十数人の人が輪になって何かが起こった。大人たちの隙間から覗いて見ると一人の男が殴る蹴るの暴行を受けていた。よく聞くと戦争中に目立って権力を行使した人達が仕返しをされていた。やられている人はうめき声をあげ、半殺しになっていたようだがそれでも容赦なくやられていた。私は怖くなって見ていられなくなり、あとはどうなったのか判らない。他には、お金を隠しもっている人が暴かれていた。その人はノートや本の間に紙幣を挟み込み、糊

で貼り付けて何冊も持っていた。この様なやりかたは子供にも直ぐにわかり、人々が怒るのは当たり前だと思った。こうした事件は博多港の待機場でも起こっていた。待機中に泊った所は窓ガラスも無く、赤レンガ倉庫などで土間に紙きれを敷いて雑魚寝をした。今にも崩れ落ちそうな建物だったが、当時は子供だった故に苦痛には感じなかった。戦争中、何事にも耐え凌ぐ学校教育を叩き込まれていたからである。

引揚者は葫蘆島に集まった。何日かかったのか正確には記憶は無いが、ひと月はかかったであろう。押し寄せた人々は数知れなかった。私は日本へ帰る船に乗る順番を待った。風呂などは何日も入っていないので、体は汚れていて蚤やシラミが人に移っていくので乗船前にDDT散布をし、体中を消毒した。白い粉を衣服の下から吹き付けるので顔も白くなり、お互いの顔を見て笑いあった。歩けない人たちはタンカに乗せられて看護婦さんに丁重に運ばれていた。

船はアメリカから送り込まれた、貨物を運搬する古い船であった（アメリカからの船でヴィクトリー型船)。大きな貨物艙がいくつもあり、前後には仕切りがあって両側は鋼板一枚の壁で海と遮られた。船底に新聞紙のようなものが敷かれ、人々は外を見ることができなかった。船底に缶詰の様に詰め込まれ何日も座り続けた。大人たちはデッキと言われる船上に食事を貰いにいき、船底にいる人達に配った。便所はデッキの上に仮に作られた場所に行かねばならなかった。船が深いので細い階段が掛けられていたが、この階段を昇り降りする時、子供たちや女性にとっては恐怖であった。下を見ると目がくらみ足を踏み外して落っこちる人もいて、そんな事故が毎日何回かは起こった。船底にしこたま打ち付けて、怪我をしていたのであろうが、十分な手当を受けることが出来なかったと思う。食料事情も悪く、栄養失調で亡くなる人もいた。そんな時は船上のデッキから、白い布に包まれて海に葬られた。多くの人が明日は我が身と思っていたと思う。波の荒い時にトイレに行くと、デッキの上に波がザブザブと音を立て、左右に押し寄せていた。初めての光景であったため、怖くなって慌てて船倉に帰った。

日本海・玄界灘を超え、博多港に入ると船上では大人達の歓声が上がった。その声は幾多の困難を乗り越え、よくここまでたどり着けたという喜びに溢れていた。船内で検疫を受け正常者から上陸したが、私は船内で暫く待機した記憶がある。港は引揚者でごった返した。これから先ははっきりした指示もなかったため、私はゾロゾロと人の動きに続いた。夫々の故郷へ帰る為に列車を待つ時間が続いた。運行時間の定まっていない列車が入ると、一斉に乗りこんだ。窓から入るのは当たり前で、子供や女子は中から引っ張り上げてもらった。親子は離ればなれになら無い様に必至に頑張っていた。そ

して少しのゆとりもなく列車内の床に座り込んだ。彼らも疲れがたまっていたのであろう。

居住していた龍井満洲電業社宅（撮影：池田雅躬）

出発地の龍井駅（撮影：池田雅躬）